

I Samuel 4:14-18, 5:1-10, 6:1-21, 7:1-11

(Iサムエル4:14-16)「エリが、この泣き叫ぶ声を聞いて、『この騒々しい声は何だ』と尋ねると、この者は大急ぎでやって来て、エリに知らせた。エリは九十八歳で、その目はこわばり、何も見えなくなっていた。その男はエリに言った。『私は戦場から来た者です。私は、きょう、戦場から逃げて来ました。』するとエリは、『状況はどうか。わが子よ』と聞いた。」

イスラエルのひどい敗北のニュースが町に届いたとき、大きな泣き叫びが起きました。年老いて、目が見えなくなっていたエリは、そのわけを訊ねます。

(Iサムエル記4:17-18)「この知らせを持って来た者は答えて言った。『イスラエルはペリシテ人の前から逃げ、民のうちに打たれた者が多く出ました。それにあなたのふたりの子息、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました。』彼が神の箱のことを告げたとき、エリはその席から門のそばにあおむけに落ち、首を折って死んだ。年寄りで、からだが重かったからである。彼は四十年間、イスラエルをさばいた。」

エリは、息子たちの死を告げられたときには落ち着きを保っていましたが、神さまの契約の箱が奪われたことを知ったとき、仰向けに落ちて死にました。エリは太っていました。心臓発作を起こしたのかもしれませんが。彼は弱く、甘い父親ではありませんでしたが、エリは神の人だったと私は信じます。

エリが死んで、サムエルは神さまのスポークスマンの地位に着きます。

5章、6章

テーマ:ペリシテ人への神さまのさばき。

5章と6章は、契約の箱を奪って自分たちのものとしていたペリシテ人の経験を説明しています。彼らは、契約の箱自体に力がないことを知りました。契約の箱は決して幸運のお守りなどではありませんでした。この箱のせいで、(Iサムエル5:6)「さらに【主】の手はアシュドデの人たちの上に重くのしかかり…」ました。彼らの偶像、ダゴンはひっくり返って壊れました。人々は不思議な病気にかかり、多くが死にました。契約の箱が運ばれるところどこにでも、死の破滅が付きまといました。ペリシテ人たちは、自分たちのいのちを心配して、ベテ・シェメシュの野に向け、契約の箱を車に乗せてイスラエルに返します。

(Iサムエル5:1-4)「ペリシテ人は神の箱を奪って、それをエベン・エゼルからアシュドデに運んだ。それからペリシテ人は神の箱を取って、それをダゴンの宮に運び、ダゴンのかたわらに安置した。アシュドデの人たちが、翌日、朝早く起きて見ると、ダゴンは【主】の箱の前に、地にうつぶせになって倒れていた。そこで彼らはダゴンを取り、それをもとの所に戻した。次の日、朝早く彼らが起きて見ると、やはり、ダゴンは【主】の箱の前に、地にうつぶせになって倒れていた。ダゴンの頭と両腕は切り離されて敷居のところにあり、ダゴンの胴体だけが、そこに残っていた。」

ペリシテ人たちが契約の箱を奪ったとき、彼らは何か良いものを手に入れたと思いました。でも、彼らが契約の箱を自分たちの神ダゴンの宮に置くたびに、偶像は倒れました。さて私は、どの注解書にも書かれていないであろうと思われる意見を出したいと思います。ダゴンの宮に主の契約の箱が置かれたことで、偶像が倒れ、胴体だけが残っていたとき、これは神さまのユーモアのセンスをあらわしていると思うのです。神さまは、ペリシテ人たちに、彼らの神はご自分の前に何の力もないことを明らかにされました。私は、このことで主が本当のユーモアのセンスを持っておられることを示していると思います。なぜなら、このことはペリシテ人たちを大いに閉口させたからです。彼らはすぐに、この契約の箱をもっていることには何の良いこともないということに気づきます。事実、契約の箱を持っていることは、彼らにとって実に危険なことでした。

(Iサムエル5:6-7)「さらに【主】の手はアシュドデの人たちの上に重くのしかかり、アシュドデとその地域の人々を腫物で打って脅かした。アシュドデの人々は、この有様を見て言った。『イスラエルの神の箱を、私たちのもとにとどめておいてはならない。その神の手が私たちと、私たちの神ダゴンを、ひどいめに会わせるから。』」

これらの災害は、偶然ではないかも知れないと考え、彼らは契約の箱をペリシテ人の別の町に送ります。

(Iサムエル5:6-10)「それで彼らは人をやり、ペリシテ人の領主を全部そこに集め、『イスラエルの神の箱をどうしたらよいでしょうか』と尋ねた。彼らは、『イスラエルの神の箱をガテに移したらよからう』と答えた。そこで彼らはイスラエルの神の箱を移した。それがガテに移されて後、【主】の手はこの町に下り、非常な大恐慌を引き起こし、この町の人々を、上の者も下の者もみな打ったので、彼らに腫物ができた。そこで、彼らは神の箱をエクロンに送った。神の箱がエクロンに着いたとき、エクロンの人たちは大声で叫んで言った。『私たちのところにイスラエルの神の箱を回して、私たちと、この民を殺すのか。』」

不遜な意味ではなく、彼らすべてが責任をなすりつけあっていました。最終的に、ペリシテ人の領主たちが会合を開いて、契約の箱をイスラエルに返すことを決定しました。神さまはペリシテ人たちにさばきを送られました。ペリシテ人たちは、

「イスラエルの契約の箱を、どうしたらよいものだろう？」
と考えていました。

(Iサムエル6:1)「【主】の箱は七か月もペリシテ人の野にあった。」

ここでも、不遜な言い方をするつもりはありませんが、契約の箱を持っていることは、ホット・ポテトをもっているようなものでした。(訳注:“ホット・ポテト”は、熱いジャガイモという意味で、大人数で輪になって、「ホット・ポテト、ホット・ポテト」とはやしたてながら手にもっているお手玉やボールなどが、最終的に自分の手に残らないように他の人に回す子どもの遊び。やっかいもの、難問などもホット・ポテトと呼ぶことがある。)契約の箱がダゴンの偶像のそばに置かれるたびに、ダゴンはひっくり返りました。最終的に残ったのは、胴体だけで、(訳注:原文は stump、つまり木の切株となっています。ダゴンは木像だったのかも知れませんが)礼拝するにはそれほどふさわしいものではありませんでした。偶像というだけでも十分悪いというのに、ひどい姿です！ですから、ガテの人々はもう嫌だというわけで、契約の箱をエクロンに送り、そしてエクロンの人々も、どこかにやってしまいたいと思いました。

(Iサムエル6:2-4)「ペリシテ人は祭司たちと占い師たちを呼び寄せて言った。『【主】の箱を、どうしたらよいだろう。どのようにして、それをもとの所に送り返せるか、教えてもらいたい。』すると彼らは答えた。『イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。彼に対して償いをしなければなりません。そうすれば、あなたがたはいやされましょう。なぜ、神の手があなたがたから去らないかがわかるでしょう。』人々は言った。『私たちのする償いとは何ですか。』彼らは言った。『ペリシテ人の領主の数によって、五つの金の腫物、すなわち五つの金のねずみです。あなたがたみなと、あなたがたの領主へのわざわいは同じであったからです。』

ペリシテ人は、契約の箱をどこかにやってしまいたかったのですが、どのようにしたら良いか、分かりませんでした。そこで彼らは、祭司たちと占い師たちにお伺いを立てます。彼らは、神さまの契約の箱を何もつけないで送り返してはならないと人々に教えます。彼らはささげものをしなければならないと言うわけですが、このささげものは、ペリシテの礼拝の下賤さをよく表しています。多くの人たちはなぜ神さまがペリシテ人たちを神さまの土地から追い出されたのだらうと不思議がります。約束の地は、世界の十字路にあり、この地を所有する人々は世界中の人々に影響を与えます。神さまは、彼らの礼拝の下賤さのゆえに、彼らを追い出されました。彼らは完全に神さまに背を向けていました。ここで、神さまは彼らにもう一度神さまに立ち返るチャンスを与えておられるのです。

ペリシテ人のささげものは五つの腫物(emerods)(痔核 hemorrhoids、腫れ物 tumors またはねぶと／おでき boils かもしれません)と五つのねずみでした。(訳注:日本語では繰り返し、「金の腫物、すなわち金のねずみ」「金のねずみ、すなわち腫物」とひとつもののように訳されていますが、英語では、「金の腫物と金のねずみ」「金のねずみと腫物」と両方がささげられたと訳されています。)

(Iサムエル記6:11)「そして【主】の箱を車に載せ、また金のねずみ、すなわち腫物の像を入れた鞍袋を載せた。」

ペリシテ人たちが契約の箱をイスラエルに返したとき、彼らがそれを車に乗せたことに注目してください。彼らが契約の箱を車に載せても、何も起こりません。なぜだか分かりますか？とても率直に言って、彼らは何も知らなかったのです。神さまは彼らが取ったこの行動の責任を問われることはありません。でも、イスラエル人は分かっていました。そして神さまはイスラエル人が契約の箱を扱うその扱い方のせいで、彼らをさばかれます。なぜ違うのでしょうか？イスラエル人は分かっていたからです。（訳注：余計に分かっている分、多くの責任を問われる、ということをお願いしたいと思います。）

（1サムエル記6：12）「すると雌牛は、ベテ・シェメシュへの道、一筋の大路をまっすぐに進み、鳴きながら進み続け、右にも左にもそれなかった。ペリシテ人の領主たちは、ベテ・シェメシュの国境まで、そのあとについて行った。」

車を引かされた雌牛たちは、明らかに自分たちの自然な本能にさからって、自分の住処に子牛を残して去って行きます。これは、ペリシテ人たちにとって、自分たちがこうむった災害は、確かに神さまのなさったことだという、納得の行く証拠でした。

（1サムエル記6：13－15）「ベテ・シェメシュの人々は、谷間で小麦の刈り入れをしていたが、目を上げたとき、神の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ。車はベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑に入り、そこにとどまった。そこには大きな石があった。その人たちは、その車の木を割り、その雌牛を全焼のいけにえとして【主】にささげた。レビ人たちは、【主】の箱と、そばにあった金の品物の入っている鞍袋とを降ろし、その大きな石の上に置いた。ベテ・シェメシュの人たちは全焼のいけにえをささげ、その日、ほかのいけにえも【主】にささげた。」

ごらんのように、イスラエル人たちは、自分たちのためには、ペリシテ人から何も受け取ることはしません。もちろん、彼らはそのことで賞賛されるべきです。

（1サムエル記6：16）「五人のペリシテ人の領主たちは、これを見て、その日のうちにエクロンへ帰った。」ペリシテ人たちは契約の箱が彼らの手元に帰ったことを見て、自分たちの手から契約の箱が去ったことを喜びました。

さて、契約の箱がイスラエルに戻ったとたんに、問題が起こります。

（1サムエル6：19）「主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。【主】の箱の中を見たからである。そのとき主は、その民五万七千人を打たれた。【主】が民を激しく打たれたので、民は喪に服した。」

ベテ・シェメシュの人々は、神さまが厳しく禁じられていたことをします。この契約の箱は、会見の天幕の至聖所にあるべきものでした。大祭司しかそれを見ることはできませんでした。しかも、その大祭司でさえも、1年に1回だけ契約の箱の前に入っていくことが許されていただけでした。荒野での行進のときのように契約の箱が運ばれるときには、注意深く、うやうやしく覆いがかけられました。ペリシテ人たちはこれらのことを知りませんでしたが、イスラエル人たちは確かに知っていました。

（1サムエル6：20）「ベテ・シェメシュの人々は言った。『だれが、この聖なる神、【主】の前に立ちえよう。私たちのところから、だれのところへ上って行かれるのか。』」

契約の箱の中をのぞいて、彼らが見てはいけなかったものを見た、ということを行っているわけではありません。それが問題なのではないのです。契約の箱は、箱でした。箱は、いつも箱です。ポイントは、至聖所の中の契約の箱のところで、神さまがご自分の民に会われたということです。神さまは今、彼らと会ってはおりません。彼らは神さまに背を向けてしまったのです。彼らの反抗と冒涇は、彼らの不従順に現れています。このことのゆえに、神さまは彼らにさばきをもたらされます。

（1サムエル6：21）「そこで、彼らはキルヤテ・エアリムの住民に使者を送って言った。『ペリシテ人が【主】の箱を返してよこしました。下って来て、それをあなたがたのところに運び上げてください。』」

今彼らは、迷信的になっていて、契約の箱をどこかへやってしまいたいと思っています。彼らはキルヤテ・エアリムに使者を送って、次のように言わせました。「来て、持って行ってください。」言い換えれば、イスラエル

は契約の箱を受け取る準備ができていないのです。神さまの民が、神さまに立ち返る準備ができていないということです。

7章

テーマ: サムエル、リバイバルを指揮する。エベン・エゼルでの勝利。

20年のちに、イスラエルは契約の箱を受け取る準備ができます。イスラエルは、主に仕えるためにバアルとアシュタロテから顔をそむけます。

サムエル、リバイバルを指揮する

(Iサムエル記7:1)「キルヤテ・エアリムの人々は来て、【主】の箱を運び上げ、それを丘の上のアビナダブの家に運び、彼の子エルアザルを聖別して、【主】の箱を守らせた。その箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は【主】を慕い求めていた。」

20年たって、イスラエル人たちはバアルとアシュタロテを離れ、神さまに立ち返り始めます、彼らは、神さまを慕い求めるところに来ていました。

私たちが生きているこの時代に、神さまのみことばに対する興味が新しくわいて来ています。とても嬉しいです。なぜなら、私は、神さまの民は聖書に立ち返らなければならないという強い確信を持っているからです。私は、創世記から黙示録に至るまでの聖書の66の書物全部が神さまのみことばであると信じています。私は、聖書の完全性と無謬性とを信じ、私たちは聖書の教えに帰る必要があるという事実を信じています。私たちが神さまのみことばに戻るのに、長い時間がかかっています。進展はゆっくりです。あと何年かかるのでしょうか？

今日の多くの人たちは、政治家がいくつもの約束をしておいて、それを守らないことに飽き飽きしています。彼らのために、彼らには約束を守ることが“できない”のだということを言いたいのです。それなのに彼らは約束します。同時に、あらゆる種類の新しいノストラダムスが、大学教授たちやあらゆる分野のリーダーたちの中から出て来ています。間違っていることはひとつだけです。それらは上手く行きません。もしかしたら、アメリカが何かで死に物狂いになったら、神さまに立ち返るかもしれません。

20年たったあとにイスラエルに起こったのは、そういうことです。

(Iサムエル記7:3-4)「そのころ、サムエルはイスラエルの全家に次のように言った。『もし、あなたがたが心を尽くして【主】に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を【主】に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。』そこでイスラエル人は、バアルやアシュタロテを取り除き、【主】にのみ仕えた。」

これは、実際的なサムエルの偉大なミニストリーの始まりです。イスラエルは偶像礼拝に深くひたっていました。彼らは生けるまことの神さまに背を向けていたのです。彼らはあまりにも多くの戦いに負けて、それがあふれたことになってしまっていました。彼らはこれ以上ないほど落胆していました。彼らは主を思って嘆き始めました。私たちもまた、主に立ち返る必要があります。

「私たちは、遠くの国で豚の食べるいなごめを食べるのには飽き飽きだ。父の家に帰りたい」と言っている多くの人々の心には、飢え渇きがあります。彼らは、神さまのみことばのドアを通過して行かなければなりません。

(Iサムエル記7:5-6)「それで、サムエルは言った。『イスラエル人をみな、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために【主】に祈りましょう。』彼らはミツパに集まり、水を汲んで【主】の前に注ぎ、その日は断食した。そうして、その所で言った。『私たちは【主】に対して罪を犯しました。』こうしてサムエルはミツパでイスラエル人をさばいた。」

サムエルはイスラエルの預言者であるばかりでなく、同時に民族のための士師です。ここで、イスラエルがにせの神々から本当の神さまに立ち返っているのが見られます。この人、サムエルは彼らのために祈り、

人々は自分たちの罪を告白します。これが神さまの民が帰ってくるべき道なのです。私はこのほかには道はないと思います。

今日、神さまに祝福されるという、あらゆる種類の方式について耳にします。太字で強調して、その通りを申し上げます。神さまの民に必要なのは、神さまのところに行って自分たちの罪を告白することです。人々は、自分たちを神さまのみことばの光の中で理解すべきなのです。もし私たちが本当に自分たちを理解するなら、私たちは神さまのご栄光を受けることができないことを理解し(ローマ3:23参照)、そして、そののちに神さまの御子であるイエス・キリストの血が、私たちをすべての罪からきよめ続けてくださるという確信を持つことができるのです。(ヨハネ1:9参照)

(ローマ2:23)「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」

(ヨハネ1:9)「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

エベン・エゼルでの勝利

(1サムエル記7:8-11)「そこでイスラエル人はサムエルに言った。『私たちの神、【主】に叫ぶのをやめなさい。私たちをペリシテ人の手から救ってくださいるように。』サムエルは乳離れしていない子羊一頭を取り、焼き尽くす全焼のいけにえとして【主】にささげた。サムエルはイスラエルのために【主】に叫んだ。それで【主】は彼に答えられた。サムエルが全焼のいけにえをささげていたとき、ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして近づいて来たが、【主】はその日、ペリシテ人の上に、大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエル人に打ち負かされた。イスラエルの人々は、ミツパから出て、ペリシテ人を追い、彼らを打って、ベテ・カルの下にまで行った。」

神さまはイスラエルに大きな勝利を与えられました。この勝利は、長い敗北のときのあとの初めての勝利でした。この人々は偶像礼拝に陥っていました。彼らは陰うつな反抗をしていました。彼らが神さまに立ち返り始めたとき、サムエルは彼らに罪の告白と神さまに立ち返る約束を強要しました。その結果、神さまは彼らに、ペリシテ人に対する大勝利を与えられたのです。